

マ

キ

エ

化粧文化研究ノート

ポーラ文化研究所

No. 37

2017年12月

近代の化粧



マキエは、フランス語で化粧するという意味です。

この機関誌は人と化粧文化の関わりについて、

いろいろな角度から探り、化粧とは何かを考えていきます。

化粧に関する研究成果をお届けし、

皆様からの貴重な情報を頂き、

情報の受発信機能を発揮する機関誌をめざします。

MAQUILLER

目次

発行にあたって……3

[化粧文化研究報告]

近代の女性美容家 遠藤波津子 富澤洋子……6

[寄稿]

美人画にみる理想の女性美 文展期の婦人雑誌をめぐって 山本由梨……8

[研究のための資料紹介]

近代の紅……10

[研究のための文献紹介]

キネマ旬報社編『日本映画人名事典・女優篇』……11

化粧文化インフォメーション……12



表紙解説

ホーカー液

堀越嘉太郎商店が、明治45年（1912）に発売した化粧液。広告には「美顔料」「白味剤美顔料」のキャッチコピーがあるので、現代の乳液や美容液のようなアイテムだったと考えられる。

堀越嘉太郎商店（商号二八堂）は、作家・佐多稲子の自伝『年譜の行間』にも登場する化粧品会社である。白粉なども手がけたが、一番の売れ筋商品はこのホーカー液だったようで、大正時代初期には模造品の検挙なども行われている。同社の派手な宣伝広告は有名で、当時は宣伝に現代のような法的規制がなかったため、色を白く、キメを細かく、白粉のツキ・ノビ・ノリをよくし、ニキビやソバカスによく、美男子美婦人を製造する実質保溫医の化粧料也、と宣伝文句も意欲的である。

発行にあたって

化粧文化研究ノート「マキエ」no.37をお届けします。

2011年以降、ポーラ文化研究所が研究テーマとしてきた近・現代の化粧文化研究の一環として、「マキエ」no.31～36では、明治～昭和時代の化粧についての研究報告を、時代を追って特集してまいりました。昨年2016年には一連の研究の成果として、デジタル年表『近・現代化粧文化史年表』と『明治・大正・昭和の化粧文化—時代背景と化粧・美容の変遷』を刊行しています。明治から大正、昭和へと、江戸時代以前の伝統的な化粧法から現代の化粧へ、日本独自の化粧から欧米を意識した化粧へ大きく転換した時期を概観する資料として、おもに文化研究所が所蔵する資料をもとに編さんしたものです。

昭和に続く平成も来年で30年が経過し、社会のさまざまな動きを背景に、化粧文化はこれまで以上の変化を見せています。そこで、本年より当研究所では同時代の化粧の状況を記録、保存し次代へ伝えるための平成化粧文化史編さんのための資料収集にも着手しました。

『近・現代化粧文化史年表』については、「マキエ」no.36で詳しくご紹介しましたが、本年はこの成果を踏まえ、さらに近・現代の化粧文化研究を充実させるよう、化粧品や化粧法の変化、個々の美容家などの各論を中心テーマに据えています。

研究深耕のスタートとなる本号では、改めて「近代の化粧」を特集しました。所員レポートでは近代化

粧・美容の中心人物のひとり遠藤波津子を、所外からの寄稿では、山種美術館の学芸員・山本由梨氏に、近代の美人イメージの形成について、ご専門の近代日本美術史の分野からの論考を掲載しています。

「マキエ」は、表紙に掲げてありますように、人と化粧文化の関わりについて、いろいろな角度から探り、化粧とは何かを考える情報交換誌として、1990年に創刊しました。これからはさらに、化粧文化研究進展のために、近接する研究分野の方々との情報交換や連携のツールとなることを目指してまいります。まずは本号より新たな試みとして、ポーラ文化研究所のホームページでの全文公開を計画しております。ぜひ関連領域にご興味の方へご案内いただければ幸いです。より多くの方に読んでいただき、ご意見や他の近・現代化粧文化についての研究発表や展覧会などの情報発信に役立ててまいります。

ポーラ文化研究所では化粧道具や装身具、約6,500点を所蔵し、ミュージアム活動として各地の美術館や博物館への展示協力やレクチャーを行っています。今後の活動では、外部の方々との連携にも力を入れてまいりますので、ご協力のほどどうぞよろしくごお願い申し上げます。

◎ミュージアム活動

[企画展]

ポーラ文化研究所40周年記念 祝いのよそほい (ポーラ ミュージアム アネックス 1月15日～2月21日)

[企画・展示協力]

櫛・簪とおしゃれ—粋に華やかに、優しく— (奥田元宗・小由女美術館 3月1日～4月17日)

Modern Beauty—フランスの絵画と化粧道具、ファッションにみる美の近代 (ポーラ美術館 3月19日～9月4日)

シルクロードのよそおい—トルクメンの装身具を中心に (ポーラ美術館 9月7日～2017年3月3日)

[展示協力]

化粧—貴人の嗜み 庶民の喜び— (古代オリエント博物館 10月1日～11月28日)

[所内資料閲覧室小企画展示]

ベースメイク法の変遷 (5月～10月)

紅のいろどり (11月～2017年4月)

[ポーラ ザ ビューティー銀座店カルチャーコーナー]

蘭引とポーラの化粧品

(8月1日～11月30日)

髪飾りと吉祥文様

(12月1日～2017年2月24日)

◎レクチャー

「結髪実演 寛文美人から元禄美人へ」村田孝子 (1/16 千葉市美術館 約150名 「初期浮世絵展」関連イベント)

「モダンビューティ展トークセッション」津田紀代・元所員 (4/13 東京青山・arara ラウンジ 77名 「モダンビューティ展関連イベント」)

「日本における美白文化の変遷」鈴木正幸 (6/1 日中化粧品国際交流協会 130名)

「江戸歴史講座」村田孝子 (10/6 日比谷図書文化館 約200名)

「日本の黒化粧」富澤洋子 (10/8 古代オリエント博物館 約30名 「化粧展」関連イベント)

「浮世絵からみる化粧文化講座」富澤洋子 (10/13 JR東日本大人の休日倶楽部趣味の会 29名)

「井原西鶴の浮世草子に見る江戸前期の風俗、化粧、結髪」村田孝子 (11/6 堺市市民芸術祭参加講演会 50名)

「実践報告 ポーラ文化研究所」富澤洋子 (11/30 女性教育会館アーカイ



祝いのよそほい展示風景 ©POLA MUSEUM ANNEX



祝いのよそほい展示風景 ©POLA MUSEUM ANNEX

ブ保存研修 32名)

「ポーラ文化研究所の活動紹介」立川有理子 (12/17 東京女子大学学芸員課程・伝統文化振興財団見学会 20名)

◎執筆

女性モード誌『ヘアモード』連載「歴史から読み解く12の美伝」村田孝子 (連載 1～9月号)

Vol.4 彦根屏風から読み解く 江戸時代初期の結髪と装い

Vol.5 浮世絵師・鈴木春信が描いた明和の三美人・笠森お仙

Vol.6 浮世絵師・喜多川歌麿が描いた寛政の三美人・難波屋おきた

Vol.7 古代エジプトの美容事情

Vol.8 古代ローマ時代の美容事情

Vol.9 16世紀のファッション事情

Vol.10 フォンタンジュ・スタイルとつけぼくろ

Vol.11 18世紀の結髪師

Vol.12 シュミーズドレスとレカミエ夫人

『薬事日報』「連載 日本文化 化粧の歴史」村田孝子「黒の化粧 眉化粧の歴史」(薬事日報社、1月1日)

『第48回化粧品技術基礎講習会テキスト』富澤洋子「化粧の歴史と文化」(東京化粧品工業会 6月)

◎化粧と生活の調査レポート

「女性の化粧行動・意識に関する実態調査 2016」川上博子 スキンケア篇・メイク篇、口紅の流行色—認知と使用状況

◎出版

『デジタル版 近・現代化粧文化史年



フォーラム顔学2016 デモ発表

表』(1月)

『明治・大正・昭和の化粧文化～時代背景と化粧・美容の変遷』(7月) 化粧文化情報誌「化粧文化PLUS」Vol.9特集：リマインド昭和 (10月) 化粧文化研究ノート「マキエ MAQUILLER」No.36特集：戦後の化粧—化粧大国ニッポンへの序章 (11月)

◎ホームページ等情報発信

URL : <http://www.po-holdings.co.jp/csr/culture/bunken/>

おもなコンテンツ

・新・日本のやさしい化粧文化史 (連載 第25～33回)

・今月のビューティニュース (～7月 連載 第7～11回)

・やさしい日本髪の歴史

(～8月 連載 第7～15回)

・クールジャパン伝統化粧の世界

(～5月 連載 第7～10回)

・BEAUTY NEWS

(8月～ 連載 第1～4回)

・季節のおしゃれの豆知識

(8月～ 連載 第1～4回)

・化粧と生活の調査レポート

◎ポーラ化粧文化情報センター

毎週水曜日開館

◎その他

日本顔学会大会フォーラム顔学2016デモ発表「近・現代化粧文化史年表」

(東京藝術大学 11月19、20日)

近代の女性美容家 遠藤波津子

富澤洋子／ポーラ文化研究所研究員

はじめに

明治38年(1905)、現代でいうところのトータルビューティーサロン「理容館」が東京・京橋区竹川町(現中央区銀座7丁目付近)に開店した。おもなサービス「衛生美顔術」の施術料が1回50銭。経営は順調なすべり出しとはいかなかったようだが、エステティックサロンの草分けの一つが誕生した。明治40年代から昭和8年に亡くなるまで、「理容館主」という肩書での遠藤波津子(1862—1933)の美容家活動は、伝統的な日本の化粧から、欧米の影響を受けた近代の化粧への転換期にあたる。

欧米の最新の美容法「美顔術(注1)」

日本で最初に美顔術を導入したのは誰なのか、現時点での確定は難しい(注2)。明治30年代後半に、横浜の居留地に滞在していた医師・ギャンブルが日本人に伝授したとされ、当事者の回顧談などから、受講者として横浜の理髪師・芝山兼太郎、東京日本橋の理髪師の妻・莊司直、理容館の遠藤波津子、また、別経路として米国滞在経験のある西村龍之助などの名前が挙がるが、決め手がない。理容館に関連した早い記録として、西村龍之助が東京・京橋区南金六町の日勝亭に出張して美顔術の施術を行っているという明治39年(1906)8月28日付の『東京朝日新聞』の記事がある。日勝亭は遠藤波津子の夫・芳太郎が経営していた玉突き場で、スチームやマッサージによって皮膚を清浄にして栄養を与える「目下欧米諸国の新流行にして最も進歩せる化粧法」と紹介されている。

同じ年の秋から冬にかけても『東京朝日新聞』に「理容館の美顔術」が掲載された。「美顔術」命名にあたり、日勝亭に集まる東京朝日などの新聞記者たちが係わったとされているので、これらの記事は事業応援といった意味合いもあったのかもしれない。しかし「術」というネーミングが「医術」「奇術」を想起させ、顔に劇的な変化をもたらすと考えられたり、顔の手入れのサービスを受けることへの後ろめたさなどもあって、冒頭にも記したとおり、美顔術が正しく認知され、公然と行われるようになるには、少し時を要したようだ。

理容館主 遠藤波津子

明治40年(1907)4月17日の『東京朝日新聞』に掲載された新聞広告によれば、理容館の主な営業は「最新化粧法施術所」「化粧品直輸入販売」であった。同紙2月には前述の西村龍之助が理容館などを会場に美顔術

を女性の職業訓練として伝習していたという記事もある。約半年後の9月には理容館は「美容術の遠藤波津子女史」を前面に押し出しての営業に転換したようである(注3)。明治41年(1908)2月には文芸雑誌『新小説』の家庭欄に遠藤波津子の談話「実験より得たる化粧の秘訣」が紹介された。文明開化から40年経たとはいえ、新聞や雑誌の美容記事には女髪結いによる髪型の提案が多く、市場の化粧品も、歯磨、香油、白粉など旧来からある品目が大部分を占めていた。髪結いでもない女性がクリーム、ルーラー、カップなどのカタカナを並べて欧米で流行の美容法を紹介するその文章の調子が、いくぶん好意的ではなく感じられるのも仕方のないことなのかもしれない。明治41年には婚礼化粧の事業も広告するようになり、同年12月には『女鑑』に女性による体験談「美顔術を受けたる記」で「顔の美といはんよ



『婦人画報』第10号 明治41年4月(国立国会図書館所蔵)

り、顔の衛生にも此上なし」と好評を得るなど、理容館の認知は広がっていき、「竹川町の理容館と云へば、人は、美顔術の施術所といふ事は、先刻承知」(注4) となっていた。

新旧取り混ぜた美容法

遠藤波津子の最初期の美容記事に『婦人くらぶ』明治42年(1909)3月号に掲載された「春の化粧法」がある。輸入クリームを使った日やけ予防や、自分の肌の色に応じた7色の白粉の使い分けなど、輸入品を扱う理容館主らしい欧米の化粧を取り入れた内容である(注5)。明治末年からは、『婦人世界』、『婦人画報』など商業誌へも季節ごとの化粧法の提案を行っていった。その基本的な内容は、化粧の下準備として、肌当たりの柔らかい顔用の石鹸や糠を使った洗顔後にマッサージなどの簡単な美顔術、クリームや自分の皮脂を手でのばして下地とした上に白い白粉に紅で血色を加えるメイクというもので、日本の伝統化粧と欧米の影響を受けた近代化粧が混在している。

大正時代に入ると、化粧とともに着物の着方についても言及するようになり、新考案の帯結びや着物の着こなしなど、着付に特化した記事も増えていく。婚礼仕度の「式服着付、遠藤波津子」のクレジットの入った写真記事などで「着付の遠藤波津子」の地位を確立していったが、『婦人之友』(大正8~9年)、『婦人界』(大正15~昭和6年)などの女性誌の美容Q&A欄の回答者を務めるなど、美容家としての活動も引き続き行っていた。

化粧法の変化

ポイントメイクは紅の使用程度だった遠藤波津子が、『婦人之友』大正8年(1919)11月号で柔らかい鉛筆を使って描くアイラインに言及する。目を切れ長にパッチリとしたいという読者からの質問に答えたもので、当時アイメイクをするのは映画女優などが多く、一般女性へのアドバイスとしては先進的な発言だったと考えられる。遠藤波津子がポイントメイクにふれた化粧記事は多くはないが、スティック状の眉墨や口紅の使い方や、紅をマスカラのように使うまつ毛のメイクも紹介するようになる。その背景には、理容館が所在する銀座という流行の中心地で感じる、美顔術や婚礼仕度で接する女性たちの化粧に対する嗜好(志向)の変化、新しい化粧品品の発売、そして大正末から昭和初期に次々と登場した新世代の美容家の存在があったと考えられる。欧米仕込みの美容法を看板にした山野千枝子やメイ・ウシヤマ、美術界から転身した早見君子らがマスメディアで紹介する、色鮮やかな口紅やマスカラを使ったポイントメイクは、新しい時代の化粧を印象づけたことは想像に難くない。

遠藤波津子は大正14年(1925)に発足した東京婦人美容協会の初代会長に就任、女性美容家の長老的存在であった。翌年その集大成ともいえるべき著書『正しい化粧と着付』を刊行している。新聞や雑誌そしてラジオ放送で伝え続けた、寒い季節の肌をいたわるスキンケア、春先の外出にふさわしいベースメイク、暑い夏に化粧崩れを防ぐ方法、日やけし

た肌の秋口のケアについて、肌への負担を少なくした薄化粧や薄化粧に見える濃化粧…。美顔術や明治40年代以降国産品の発売も増えていくクリームなど、欧米の化粧法を取り入れながら、素肌美を大切にする日本の伝統化粧の思想で行う化粧は、開国して半世紀近く経ったとはいえ、和装と日本髪で生活する多くの女性たちに抵抗なく受け入れられたのだろう。明治時代末から昭和初期まで、大正時代を中心とした伝統の化粧と新時代の橋渡しをするかのような活動であった。

注1/美顔術の詳しい方法は『マキエ』No.30掲載の「近代のハイカラ美顔術」(津田紀代)を参照

注2/ポーラ文化研究所では、『遠藤波津子の世界』や遠藤波津子グループのウェブサイトのほか、当時の女性雑誌の記述から、一般女性向けのエステティックサロンのはじめを理容館としてきたが、今回新聞などへ対象をひろげて調査を行った。

注3/理容館の繁昌振りを伝える新聞記事「貴婦人と美顔術 避暑地での滑稽」『読売新聞』読売新聞社、1907.9.9. p3による。

注4/一記者「理容館本部(商店訪問記十)」『読売新聞』読売新聞社、1909.5.11. p5

注5/資生堂の七色白粉の発売は大正6年(1917)なので、ここで言及している白粉は海外品だと考えられる。

*参考文献

- ・遠藤波津子著『正しい化粧と着付』婦人界社、1926年
- ・『遠藤波津子の世界』婦人画報社、1985年
- ・遠藤波津子グループウェブサイト
<<http://www.hatsuko-endo.co.jp>>
(2017/9/30参照)

美人画にみる理想の女性美

文展期の婦人雑誌をめぐる

山本由梨／山種美術館学芸員

はじめに

文展期の美人画と婦人雑誌

明治40年(1907)より大正7年(1918)まで開催された文部省美術展覧会(以下、文展)において、女性像を描いた「美人画」の出品数は年々増加し、来場者からの人気を一番に集めたといわれた。本稿では、特に女性たちが文展の美人画を好んだことに着目し、彼女たちが美人画にどのように親しんでいたか、婦人雑誌を手がかりに読み解いていきたい。

当時、新たな女性向けメディアとして人々の関心をあつめた婦人雑誌は、文展が回を重ねるとともに美人画への注目度を高めていった。例えば『婦人画報』では文展出品作の図版を毎年数点掲載したが、やがては上村松園、籀木清方らの描く美人画を多く取り上げるようになる。また『女学世界』は第5、6回文展の2年にわたり、「美人画評判記」と題した、文展出品の美人画ばかりを報じる記事を掲載した(注1)。文展の美人画は、美人画のみで特集が組まれるほどに、読者の興味の集中する対象として捉えられていたのである。

さらには作品だけでなく、美人画を描く画家自身も、婦人雑誌における興味の対象となった。文展に入選した女性画家の多くは美人画を描き、同性である彼女たちは読者にとって身近に感じられたことだろう。誌面では、上村松園、栗原玉葉、池田蕉園ら女性の美人画家が文展出品作などを描く様子がしばしば写真とともに伝えられ、画家たちは制作の際の苦楽を語った。

理想の女性美を語る美人画家

文展や美人画への関心の高まりとともに婦人雑誌に登場する機会を増やした美人画家たちは、誌面における発言の場を広げていった。当時の婦人雑誌は、女性たちに対する世間一般からの「美人であれ」という期待(注2)にそうべく、読者が理想とすべき女性美を説き、美容法を指南する記事を数多く掲載した。それらの女性の美を主題にした記事において美人画家たちは、理想の美を女性に教示する語り手として登場したのである。誌面で画家たちは、自身の画業を語るだけでなく、絵画世界にとどまらない女性の美に精通した識者という立場からの発言を求められていた。

一例として大正5年(1916)12月発行『婦人画報』掲載の「年頃の令嬢に着せて見たい服装」(注3)という記事をみてみたい。ここでは籀木清方や、栗原玉葉、池田蕉園といった美人画家たちが、「年頃の令嬢」である読者にふさわしい髪結や着物の取り合わせについて、各々の考えを述べている。そのなかで清方は「私は随分創作の参考上、過去の時代の服装を探しても見ましたが、其中で私の心に残ったのは、寛文年間に流行した貴婦人の服装です」と作画の経験をもとに好みの女性の身装を語った。玉葉も、「日本画にはどうしても日本の髪がうつりがよろしうございます。東髪ですと何だか調和が取れて居ない心持ちがいたしますので、東髪に結んだ美人画はかいて見たいというき分にはなれませんのでございます」と、作画における理

想の装いを語っている。このように美人画家は、制作のうえで自身が画中の女性像に求めた美しさを、読者が目指すべき女性美の例として示した。美人画家の他にも、誌面で女性の美を語る画家はいたものの、美人画家の場合は「美人を描く」という作画経験をふまえた発言がなされたという点で特徴的といえる。着物を身にまとう女性の造形を描き慣れた美人画家による、美しい装いの具体的な提案は、読者にとっても実用的であるように思えただろう。美人画家は婦人雑誌において、理想の女性美を理解する一種の専門家的な立場から発言していたのである。

理想の美の参考資料となる美人画

また、婦人雑誌には、描かれた美人画を例示しながら、目指すべき理想の女性美を説く記事が掲載された。例えば『婦人世界』の「古今の画に現はれた日本美人の顔」(注4、図1)では、「日本の美人画の一番古いものといえば、まず大和薬師寺の吉祥寺の像でありましょう(中略)現代一流の美人画家上村松園氏の作品で、文部省展覧会に出た美人画のうち、むしろ理想的美人として描かれた『朝顔日記』の『深雪』と、この吉祥天女の絵とを比べると、技巧の上には違いがありますが、殆んど似ております」と記され、薬師寺の吉祥天像と比較しながら、上村松園の描いた美人画《娘深雪》(注5、図2)が理想の美を示す具体例として語られている。今日の女性誌がモデルを映したグラビアを掲載して美容法を読者に指南するように、当時の婦人

雑誌では、描かれた美人画が具体例として引用され、理想の女性美を語るうえでの参考資料として利用されていたのである。

これらの記事は、美人画に読者の関心を抱かせることを第一の目的としているわけではなく、読者に女性の美を語ることを主旨としており、その手段として美術作品を利用してにすぎない。一方、記事の筆者が美人画を引用する際には、その女性像を描いた画家の特徴や、美術史に関する説明がなされ、それにより読者は、美術の知識を自ずと得ることができただろう。読者は美容への興味を動機に婦人雑誌を読むことで、美術の教養も身につけることができたのである。

おわりに

以上のように、文展期の婦人雑誌における美人画への関心の在り方は、女性たちの理想の美への興味と不可分であった。文展会場の女性客も、描かれた女性像の容姿の美しさを焦点に美人画鑑賞を楽しんだと記された。例えば前掲の『女学世界』掲載「美人画評判記」（注6）では、文展の女性客2人組が松村梅叟《桃の節句》を観ながら『鳥田の女の黒好みはいいわね、帯だって渋いし…。』『今年の流行柄ね……大正記念だわ』と発言し、描かれる美人の身装に着目して美人画を鑑賞する様子が示される。実際の文展における女性の来場者全員がこのような反応を示したかは定かでない。しかし、婦人雑誌によるこのような鑑賞態度の例示により、読者は、画中の女性

の容貌や身装といった、表層的な美を起点に美人画を鑑賞する方法を学んだことだろう。理想の女性美への興味は、女性たちが美人画に親しむ手がかりのひとつとなっていたのである。

本稿は、拙稿「婦人雑誌にみる文展美人画の女性受容者-鑑賞・美容・制作-」（『美人画の諸相-浮世絵・団体・メディア-：「浮世絵・挿絵系出身の日本画研究団体に関する総合的調査研究」関連研究調査報告書』篠原聡、平成28年）の第2章〈美容の参考資料となる美人画〉を編集したものである。

注1/ABC「美人画評判記」『女学世界』

1911.11.p23-32

うづまき「文展のうはさ 美人画の評判記」

『女学世界』1912.11.p149-151

注2/近代日本にみられる、女性が美人であることへの期待と重要視については、井上章一著『美人論』リプロポート、1991.に詳しい。

注3/「年頃の令嬢に着せて見たい服装」

『婦人画報』1916.12.p27-29

注4/村上文芽「古今の画に現はれた日本美人の顔」『婦人世界』1919.1.p110-112

注5/上村松園《娘深雪》（大正3年）は、実際は文展ではなく、平和記念大正博覧会の出品作である。

注6/前掲注1、ABC「美人画評判記」。



図1



図2 / 上村松園《娘深雪》大正3年（1914）
絹本額装 足立美術館所蔵

近代の紅

明治時代、文明開化で西洋化が進められたとはいえ、化粧の世界では江戸時代以来の伝統化粧が行われており、口もとや目元、頬や耳などに色彩を与えていたのが紅だった。美人画を多く手がけた上村松園の『青眉抄』に、紅についての回顧談が掲載されている。少し長いが、以下に引用する（注1）。

小町紅の店が近くにあつた。

いつも繁昌してゐた。

その頃の紅は、茶碗に刷いて買ったものである。町の娘さん達は、みなてんでに容れ物を持って買ひに行つた。(略)

紅のつけ方にしても、茶碗に刷いた玉虫色のを、小さな紅筆で溶いて、上唇は薄く、下唇を濃く玉虫色に彩つたもので、そこに何とも言へない風情が漂ふのであつた。さうした町中の店先などに見る人達の風も、あの頃はどちらかと言ふと、江戸時代の面影が半ば残つてゐて一入なつかしいものがあつた。

「小町紅」は平安時代の美女とされる小野小町にあやかつた紅の商品名で、現在も販売を続ける東京の伊勢半ほか、複数の紅屋がこの名前前で紅を販売していた。松園が述べている小町紅の店は、京都・四条の紅平だと考えられる。

第9代紅屋平兵衛（紅平）にあたる木村照二氏の資料（注2）によれば、紅平は近江出身の木村喜兵衛を祖とする紅屋で、初代紅平・木村喜兵衛が京に出て化粧紅製造法の研究をは

じめたのが元禄8年（1695）、明治初期には、京都の特産物として海外輸出などもおこなっていたが、西洋からの輸入口紅、有鉛白粉問題などから、明治時代末から大正時代にかけて店の売り上げは年々減少し、やがて廃業したようだ。往時の紅平は小町紅のほか、白粉や化粧道具など手広く小間物を扱っていた。ポーラ文化研究所の所蔵品にも、紅猪口（図1）や紅板（図2）などのほか、秋草模様の磁器製の化粧セットがある（図3）。現在は紅猪口、白粉を溶くための蓋付きの碗、蓋のない碗、鬢水入れの4点だが、おそらくもとは5点セットだったと考えられる。前述の木村氏の資料には類似品が掲載されており、こちらは無名時代の上村松園が下絵を描いたと記されている。

東京の資料だが、大正2年の化粧品名鑑では、紅の部約70種のうち、60種近くが紅猪口や紅板などの日本紅なのに対し、昭和7年の名鑑では、日本紅と考えられる商品はほんの数点にまで減っている（注3）。明治から大正、昭和へと社会が変化する中で、松園が回想した江戸の面影は次第に薄れてゆき、日本の伝統化粧の担い手が、ひとつ姿を消していった。（富澤洋子）

注1/「四条通付近」上村松園談;中村達男編『青眉抄』六合書院、1943年、p210

注2/木村照二「紅の詩 艶を求めた紅平」1995年

注3/『東京小間物化粧品名鑑:大東京市制記念』東京小間物化粧品商報社、1932年、『小間物・化粧品業界年鑑』東京小間物化粧品商報社、1934年



図1 桜文様染付小町紅猪口、紅平、江戸時代末～明治時代



図2 花文様紙製紅板、紅平、明治時代



図3 化粧セット、紅平、明治時代

日本映画人名事典・女優篇

キネマ旬報社編

東京：キネマ旬報社、平成7年（1995）8月

22×16cm—2冊 上巻915（主要参考文献：巻頭4p） 下巻991（主要参考文献：巻頭4p, 生年月日一覧：p944-963, 出生地別一覧：p965-991）

本書は、昭和55年（1980）刊行の『日本映画俳優全集：女優編』の増補改訂版として刊行された。昭和55年版を若干の加除など再編集し、昭和55年以後にデビューした女優659名を加えた、2035人を収録している。この人数には1899年（注1）から1995年まで、原則的には主役・助演・脇役問わず、一本でも映画に出演したことのある女優、例外的に歌手やタレントも含まれている。記述内容は、1.人名、2.本名、3.生年月日、4.誕生日、5.略歴、6.主な作品（フィルモグラフィ）、7.執筆者

名という構成で、ほとんどの女優の顔写真が掲載されている。

化粧品会社が、ブランドや個々の商品のイメージに合わせたキャラクターを宣伝活動に起用する例は、現代でも多い。キャラクターには、古くは物語の登場人物や歴史上の人物、歌舞伎役者、そして芸妓らが採用されていたが、昭和時代初期にはトーキー映画の登場など本格的な映画興隆期とも重なり、主だった化粧品会社は女優と専属契約を結び盛んに映画界とのタイアップ宣伝を行ってい

た（注2）。本書は、昭和初期以降、化粧品会社と映画界の宣伝活動の一端を知る上で有用な資料である。たとえばレート・平尾賛平商店と契約していた松井千枝子（1899-1929）には約3ページを割き、どのような作品にどのような役柄・演技で出演していたのかを掲載している。

化粧品業界年鑑では昭和8年の化粧品業界のポスターの状況を、「然るに最近の傾向は、単なる美人ではないけない、表情だとか、特別に目や口に魅力があるとか、理智的であるとか、兎に角何等かの特徴がなければ広告として人の心に深く入って行かない」と伝えている（注3）。江戸時代以来の伝統化粧から個性や表情を重視する近代の化粧法へと変化する中で、スクリーン上で感情あらわに動き、話す映画女優たちは、新しい化粧の紹介者として適任だったことだろう。憧れの的、美しさの理想像として化粧品店の店頭や新聞や雑誌広告を飾り、消費者に最新の化粧を伝えた女性たちを知ることができ資料である。（富澤洋子）



注1／巻頭の「刊行にあたって」では、この年を日本映画製作開始としている

注2／レート・平尾賛平商店（松井千枝子、八雲恵美子）、ウテナ・久保政吉商店（初代水谷八重子、山路ふみこ）、ラブミー・奥住商店（夏川静江）、クラブ・中山太陽堂（入江たか子、川崎弘子）、マスター・東京尚美堂（林長二郎、田中絹代、桑野道子）、御園・伊東胡蝶園（及川道子）、資生堂（原節子）など

注3／「昭和八年の広告」『小間物・化粧品業界年鑑：昭和九年』東京小間物化粧品商報社、1934年、p218-220

化粧文化インフォメーション

《ポーラ化粧文化情報センターのご案内》

ポーラ化粧文化情報センターでは、化粧文化に関連する資料を無料で一般公開しています。蔵書約1万5000冊のうち化粧文化を知るための基本図書約3000冊を開架、センター内で自由にご覧いただけます。

開架図書の主な分野

- ・化粧・美容法
- ・化粧道具
- ・髪型、髪飾り
- ・香り、香水瓶
- ・装い、ファッション
- ・美容と医療
- ・化粧品、美容産業
- ・美人観・人相 など

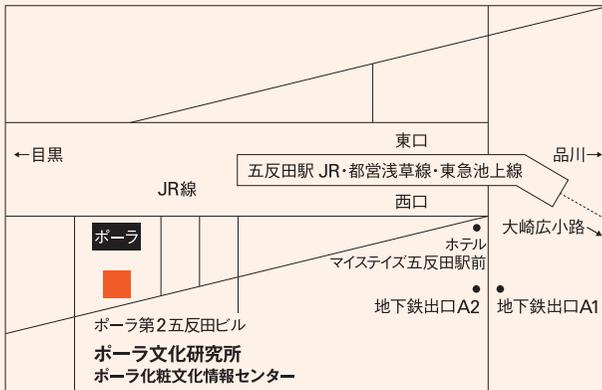
このほか、ポーラ文化研究所で行った独自調査のレポートや、1980年代以降の化粧に関連した新聞・雑誌の記事などの閲覧が可能です。

化粧文化に関する資料についてのご質問、資料の探しや所蔵状況の確認なども承ります。化粧文化の専門図書館としてお気軽にご活用下さい。



アクセスとご利用案内

- ◎開館日：毎週水曜日のみ開館（祝日・年末年始・月火木金土日は休館）
- ◎開館時間：10:30～17:00
- ◎入室無料（どなたでも無料で利用できます）
- ◎所在地：東京都品川区西五反田2-2-10 ポーラ第2五反田ビル1F ポーラ文化研究所内
- ◎電話：03-3494-7250
- ◎蔵書検索：https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000427polalib
- ◎交通案内：JR五反田駅西口より徒歩3分
都営地下鉄浅草線五反田駅A2出口より徒歩3分



【小企画シリーズ／歴史のなかのよそおい20】 「江戸時代のスキンケア」

ポーラ化粧文化情報センターでは、化粧道具や書籍などの資料を紹介する小企画「歴史のなかのよそおい」を開催しています。第20回目となる小企画「江戸時代のスキンケア」では、洗顔や整肌など江戸時代のスキンケアについてご紹介します。

◎開催期間

2017年11月1日(水)～2018年4月18日(水)
毎週水曜日のみ開館(祝日・年末年始は休館)



白梅文様蘭引（江戸時代末）

◇Hint of マキエ

今号に関するバックナンバーをご紹介します。

- ・No.26
- ・No.27
- ・No.29
- ・No.30
- ・No.31 明治・大正・昭和 化粧と時代の様相
- ・No.32 明治の近代化と化粧品 新しい美しさへ
- ・No.33 大正～戦前期の近代化粧 和洋融合の美しさ
- ・No.35 大正美人

マキエ No.37

編著／ポーラ文化研究所

発行者／小西尚子

発行所／

株式会社ポーラ・オルビスホールディングス
ポーラ文化研究所

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-2-10
ポーラ第2五反田ビル1F

Phone / 03-3494-7250

<http://www.po-holdings.co.jp/csr/culture/bunken/index.html>

発行日／2017年12月15日

ISSN 2186-0467

写真／ニルヴァーナ、伊藤信彦

デザイン／山口デザイン事務所

印刷／株式会社メディアグラフィックス